

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	村田 俊輔
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 多施設における小児初発尿路感染症の検討～再発の危険因子について～
	掲載誌 日本小児腎臓病学会雑誌 2017; 30 : 30-34
	主査 仁木 久照
	副査 菊地 栄次 副査 國島 広之
〔論文の要旨・価値〕 有熱性尿路感染症（urinary tract infection: UTI）は生後3ヵ月未満の乳児の有熱性疾患の約2割を占める。UTIの再発は腎瘢痕や逆流性腎症を来し腎機能障害のリスクを高めるが、本邦には再発因子に関する多施設研究がなく一定の見解はない。本学生命倫理委員会承認後（3412号）、3施設、9年間の有熱性UTI症例から再発の危険因子を検討した。2004年4月から2013年3月に聖マリアンナ医科大学病院、昭和大学藤が丘病院、同横浜市北部病院に入院した初発有熱性UTI症例（168例）で6ヵ月以上経過観察され、予防内服未施行の72例を対象とした。非再発群と1回以上再発した再発群に分け、発症年齢、性別、起因菌、腹部超音波検査によるThe Society for Fetal Urology（SFU）分類を用いた水腎症の重症度、発症1ヵ月以内の急性期 dimercaptosuccinic acid（DMSA）シンチグラムによる腎瘢痕の有無、排尿時膀胱尿道造影（voiding cystourethrography: VCUG）による膀胱尿管逆流現象（vesicoureteral reflex: VUR）の重症度、を診療録から後方視的に検討した。72例中再発群17例、非再発群55例で、初発時年齢、性別、観察期間に両群間で有意差はなかった。起因菌は非再発群では大腸菌53例（96%）が多く、再発群では非大腸菌が多く大腸菌は12例（71%）と少かった（$p<0.01$）。再発の有無について、初発時起因菌が非大腸菌と大腸菌、高度水腎症とそれ以外、VURの有無、で比較したオッズ比では各8.15（95%CI: 1.34-49.5）、11.6（95%CI: 1.11-119.9）、44.0（95%CI: 8.64-224.0）と、前者の場合に再発しやすかった。以上、本研究はUTIの再発因子に関して超音波検査による水腎症の評価を加えた本邦初の多施設研究であり、日本人小児における有熱性UTIの再発について新たな知見を示した臨床的に価値の高い論文である。	
〔審査概要〕 主査、副査2名、清水教授、陪席者5名のもとで審査した。約25分の発表と約40分の質疑応答が行われた。発表内容はよくまとめられており、わかりやすい内容であった。質疑応答では、患者群の設定、再発の定義、初期治療の違い（予防内服の有無）による影響、多施設研究における評価の妥当性、今後UTI再発を減らすための具体案、など多岐にわたる質問に対し、概ね的確な回答が得られた。	
最終試験結果の要旨	
〔研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価〕 膨大なデータをまとめ上げ、自ら研究に取り組んだ様子がよく理解できた。質問に対する応答から本研究領域に関わる専門的知識を習得していると判断した。次の研究課題への関心も高く、十分な研究能力を獲得していると判断した。英語読解力は英文文献の音読、和訳により十分な語学力を有すると判断した。研究発表、質疑応答を通じて真摯な態度に終始し、誠実で礼儀正しく、学位授与に値する人物であると判断した。	